

# 巻 頭 言

NKK 技術の集大成特集の発刊にあたって



副社長 岸 本 純 幸

「今回日本鋼管株式会社の全技術陣を動員して新たに鋼管技報を発刊するに至ったことは、会社の技術研究に一時期を画するものであるとともに、品質向上、生産合理化が刻下の急務である今日、極めて重要な意義を有するものとして慶賀に耐えない。」

1949年（昭和24年）、このような河田社長（当時）の巻頭言の一節とともに創刊された鋼管技報（現NKK技報）は、爾来半世紀余りにわたって当社の開発技術を国内外に広く紹介してきた。

第二次世界大戦後の荒廃をようやく脱したとはいえ、経済情勢は未だ混乱の中にあり、日本の製造業が明確な姿を見せていない時期である。このような情勢の中で国際的な自由競争の到来を予見し、同じく巻頭言において「厳格な国際規格に耐え、いかなる国際価格の変動にも打ち克つだけの良質、低コストの製品を生産すること」を高らかに宣言したわけである。

以降、日本経済の発展とともに、日本の鉄鋼生産は数百万トン／年レベルから1億トン／年を超えるレベルまで拡大した。当社もこれと軌を同じくして世界有数の一貫製鉄メーカーとしての地歩を築いてきた。もう一つの事業の柱であるエンジニアリング分野においても、鉄鋼で培った技術を活かしつつ、常に時代の要求を満たす特徴ある商品を社会に提供し続け、独特の地位を確立してきた。

とは言え、当社を取り巻く環境はこれまで決して順風満帆であったわけではない。バブル崩壊以降社会環境の激変が続いているが、このような変化の時代においても、お客様のニーズを常に追い求め提案していく精神は、どの時代においても当社技術陣の根底に流れていたと感じる。手

前勝手な感想であるかもしれないが、お客様に接する度に、当社技術陣のこのような真剣で誠実なたゆまざる努力をお客様は高く評価してくださっていると実感している。

こうしたお客様の評価の裏には、当社技術陣が取り組んだ他に類を見ない独創的な技術の存在があることは論を待たない。その技術開発の軌跡は後論に譲るが、当社技術の祖である今泉嘉一郎博士が後世に託した「輝かしい歴史と伝統」を、後輩技術者たちが立派に実現させてきたと言う事ができよう。そして「NKK 技報」はその技術の進展の生き証人としてその役割を十分に果たしてきたと信ずる。

当社は 2002 年 9 月に JFE ホールディングスの傘下に入り、2003 年 4 月には川崎製鉄株式会社との全面統合により JFE へと生まれ変わるが、冒頭の河田社長の言葉に現れている精神は時代を超えて生き続けるものと確信する。NKK 技術開発の最後の責任者として 50 余年の執筆者各位に深く感謝を申し上げるとともに、読者におかれてはここに紹介される NKK 技術の真髓にご理解を賜れば望外の幸である。